

ミャンマーで造られた Nettipakaraṇa の 註釈文献ならびに逐語訳について

古 山 健 一

1. はじめに

テーラワダ仏教において伝持されている、聖典解釈の指針書 *Nettipakaraṇa* (以下 *Nett*) は、姉妹書の *Peṭakopadesa* (以下 *Pet*) とともに、近現代の学者らにより、“*post-canonical*” や “*para-canonical*”、“*extra-canonical*”、“蔵外” などといった位置づけがなされているが、ミャンマー (ビルマ) においては、*Pet* とともに三蔵の経蔵小部に収められ⁽¹⁾、「三蔵聖典」としての地位が付与されている。

そのミャンマーでは、古くから *Nett* の研究が盛んであったようであり、*Nett* の註釈書や、「ネイッタヤ (နိဿယ)」と呼ばれる逐語訳⁽²⁾の類が、数多く造られてきた。こうした研究の営みは、今日に至るまで連綿と続いているようである⁽³⁾。

本稿では、ミャンマーで造られた *Nett* の註釈文献ならびに逐語訳について、A.D.19c にミャンマーにおいて撰述された ဝိနယဝိသုဒ္ဓိ (『三蔵史伝』、ミャンマー語。以下 *Piṭṣ*)⁽⁴⁾ を中心史料として用い、さらに同時代に属する သာသနာလောကီတရား (『教法莊嚴史書』、ミャンマー語。以下 *Sāsle*) と *Sāsanavaṃsa* (パバリ語、以下 *Sāsv*) の記述を加味して、作者、述作の年や場所、経緯などの文献情報を示す。

筆者はこれまで、一連の拙稿⁽⁵⁾において、外来的な文献との関係を示唆する要素を少なからず含み⁽⁶⁾、〈テーラワダの伝統に根ざしていない⁽⁷⁾とも評される *Nett* の、テーラワダ仏教の伝統への受容 (*acceptance*) と消化 (*assimilation*) の様相を明らかにしてきた。本稿はそれらに続くものである。ここでは、今日のミャンマーという国の領域内に限られるものではあるが、テーラワダにおける *Nett* 研究史の一端をより詳しく明らかにすることを目指す。

筆者の無知なる点については、識者諸賢のご指摘とご教示を乞う。

2. *Piṭṣ* に見られる *Nett* 関連文献

Piṭṣ を紐解くと、*Nett* に関連する文献として、そこから以下の計 12 書を拾い出すことができる (※文献番号は筆者の用いた *Piṭṣ* において付されているものである)。

(116) ミャンマーで造られた Nettipakarāṇa の註釈文献ならびに逐語訳について (古山)

① Nett 聖典 (နက္ခိ ပိဋကော, No.39)、② Peṭ 聖典 (ပေဋကောပဒေသ ပိဋကော, No.40)、③ *Netti-aṭṭhakathā* (နက္ခိအဋ္ဌကထာ, No.162)、④ *Netti-ṭīkā* (နက္ခိဋီကာဟောင်း : 『ネッティの古復註』, No.130)、⑤ *Peṭakālaṅkāra* (ပေဋကာလင်္ကာရ နိကာယ : 『ペータカーランカーラなる新復註』, No.131)、⑥ *Netti-vibhāvinī-ṭīkā* (နက္ခိဝိဘာဝနိဋီကာ, No.132)、⑦ Nett 聖典の古逐語訳 (နက္ခိပိဋကော နိဿယဟောင်း, No.526)、⑧ Nett 聖典の古逐語訳 (နက္ခိပိဋကော နိဿယဟောင်း, No.527)、⑨ Nett 聖典の古逐語訳 (နက္ခိပိဋကော နိဿယဟောင်း, No.528)、⑩ Nett 聖典の新逐語訳 (နက္ခိပိဋကော နိဿယသစ်, No.529)、⑪ Peṭ 聖典の逐語訳 (ပေဋကောပဒေသပိဋကောနိဿယ, No.530)、⑫ *Netti-aṭṭhakathā* の逐語訳 (နက္ခိအဋ္ဌကထာနိဿယ, No.659)

このうち、ミャンマーにおいて造られた文献は、⑤～⑫までの 8 書である⁽⁸⁾。以下、これら 8 書に関して、Piṭṣ、Sāsle、Sāsv における記述に依拠して、それぞれの作者、述作の年や場所、経緯などの情報を示す⁽⁹⁾。

3. *Peṭakālaṅkāra*

まず Nett の註釈書である *Peṭakālaṅkāra* (以下 Nett-mht) であるが、Piṭṣ には、「パタマ・マウンダウン [・セアロー] (ပထမမောင်ထောင် [ဆရာတော်]) 造」とあり、次のように述べられている。

アマラプーラに都・王宮を築いた ဗင်းတရ (ミンタヤー : 正法王) の治世期に、ターダナーバイン (သာသနဝံသ : 僧団王) であった Ñāṇābhivamsa-dhammasenāpati (※パタマ・マウンダウンのこと) が造った。これは『ネッティの新大復註』(နက္ခိပဟနိကာယ) と呼ばれている。[Piṭaka. p.54]

次に、Sāsle を見てみたいが、その前に述べておくべきことがある。Nett-mht については、すでに拙稿「Nettipakarāṇa の註釈文献について」(註(5)参照)の中で触れている。そこでは Sāsv と池田正隆による Sāsle の和訳⁽¹⁰⁾に依拠して論じたが、特に後者に関しては、後に Sāsle 原典を入手することができたため原文と当該の和訳を対照してみると、再考を要すると思われる箇所がいくつか含まれていた。ここでは原典に拠ってその記述を紹介するため、上述の拙稿で述べたこととは多少異なる点のあることを断っておく。

Sāsle [Sāsle. pp.199-201, Cf. 池田 2007. pp.303-307] には、Sakkarāja 暦 1151 年 (A.D.1789)

に、ボー・ドー・バヤー (ဝိသုဒ္ဓိဘုရား) 王が、パタマ・マウンダウンをターダナーバインに任命し、さらに翌年には、同師にヤダナーボウンヂョー僧院を寄進して、“Nāṇābhivamsa-dhammasenāpati-mahādhhammarājādhirājaguru” との称号 (တဆိပ်နာမ) を贈った、とある。そして、同師は、受具足後 5 年目に、三蔵書を残らず閲覽して学習しようと目指し、Netti 書 (နေတ္တိကျမ်း) にある引用聖典 (ဥဒါဟရဏ်ပါဠိ)⁽¹¹⁾ を数目 (အရေ,あるいは「基礎」とも) に基づいて書付けてみた。また、翌年の受具足後 6 年目には、Petakālaṅkāra という名の『ネッティの新復註』(နေတ္တိနိကာယ) を造った。すでに古復註 5 支分があったが、それよりも広大であったので、人びとはこれを“Mahāṭīkā (မဟာဇီကာ)”と名づけられると見なしてそのように呼んだ⁽¹²⁾、とある。

ちなみに、このパタマ・マウンダウンは Sāsle の著者でもあり、Sāsle における Nett-mhṭ の述作経緯に関する話は、本人の言であるため、信憑性が最も高い。

Sāsv は、Paññāsāmi がミャンマー語の Sāsle の内容をスリランカの長老にも分かるようパーリ語で著すべく造り、A.D.1861 に完成した史書である [Cf. 生野 1980. p.1-3; 池田 2007. p.iv]。しかしながら、Sāsv は Sāsle の翻訳書ではなく、また記述内容に相違の確認される箇所も少なくない。とは言うものの、多くの記述に対応関係を有している。

その Sāsv [R^e p.134; Cf. 生野 1980. pp.277-278] には、Kaliyuga 暦 1150 年 (A.D.1788) に、Nāṇābhissāsana-dhajamahādhhammarājaguru 長老を僧団王 (saṃgharāja) の地位に就け、翌年にヤダナーボウンヂョー僧院を寄進して“Nāṇābhivamsa-dhammasenāpati-mahādhhammarājādhirājaguru” との称号 (nāmalañcha) を贈った、とある。また、受具足後 5 年目の、僧団王となる以前の時に、“Petakālaṅkāra” という名の、Nett の註釈である最新復註 (abhinavaṭīkā) を造った、とある。

Sāsle の記述によれば、Nett-mhṭ は、パタマ・マウンダウン (Nāṇābhivamsa) がターダナーバインとなる以前の、受具足後 6 年目 (Sāsv によれば 5 年目) という、かなり若い時分に造られた。述作年は詳らかでないが、Piṭaka. の脚注には、〈[Sakkarāja 暦] 1141 年 (A.D.1779) が、Nett-mhṭ を編纂し終えた、パタマ・マウンダウンの受具足後 6 年目にあたる〉[p.54] との註記がある。

Niharranjan Ray は〈受具足後 5 年以内に Nett-mhṭ を著し、18 年目に僧団王に就任した〉[Ray. p.234] と述べているが、これは Sāsle の記述と合わないため疑問が残る。

述作に至った切っ掛けは、Sāsle によれば、三蔵を残らず閲覽し学習しようと目指して Nett を紐解いたこと、にあるようである。これは、当時のミャン

(118) ミャンマーで造られた *Nettipakaraṇa* の註釈文献ならびに逐語訳について (古山)

マーにおいて、学僧たちに、*Nett* を読めば三蔵がすべて分かる、といった認識のあったことを示唆するものであり、注目に値する。*Sāsv* には触れられていないが、*Nett* を読んだ際に、*Nett* の引用聖典について、法数名目（と考えられる）に基づいて整理し、手控えを作成したようである。筆者は未見であり、*Nett-mhṭ* が現存するのかは分からないが⁽¹³⁾、そこには、パタマ・マウンダウンの研究成果がふんだんに盛り込まれているものと想像される。

Nett-mhṭ は大部の註釈書であった。*Nett* の古復註 5 支分 — その細目は不詳であるが — よりも広大であった、とのことである⁽¹⁴⁾。“*Mahāṭṭikā*” と呼ばれる所以はここにある。上述の拙稿で言及した、*Nett* の註釈書でありながら書名に“*peṭaka*”の語を用いた理由については分からないが、パタマ・マウンダウンにおける、*Nett* を読めば三蔵がすべて分かる、といった認識と関わっているのかもしれない。

4. *Netti-vibhāvinī-ṭṭikā*

Nett の註釈書である *Netti-vibhāvinī-ṭṭikā* (以下 *Nett-ṭ*) についても、拙稿「*Nettipakaraṇa* の註釈文献について」において触れている。そこでは、*Nett-ṭ* の序偈と末文・結偈をもとに、その解題を示した。

本書の序偈には、*Mahādhammarāja* なる王の時代にいた、有名なる *Anantasuti* 大臣の要請によって著されたことが述べられている [*Nett-ṭ* B^e pp.1-2]。また、末文には、*Sakkarāja* 暦 926 年 (A.D.1564) の *Sāvana* 月 (5 月) の白分 9 日目の日出のときに、*Saddhammapāla* という名の、*Mahādhammarājaguru-mahāthera* によって著された、とあり [*Nett-ṭ* B^e p.355]、結偈には、*Mahādhammarāja* の治世期である、ミャンマー仏教暦 2108 年 (A.D.1564) の *Sāvana* 月白分 9 日目に著された、とある [*Nett-ṭ* B^e p.356]。

Piṭṭ には、「*ダダマ* (ဝဒ္ဓမ္မ, = *Saddhamma*) 造」とあり、次のように述べられている。

ヤダナーブーラ (ရတနာပူရ, = *Ratanāpūra*) なるアワ (အဝ, インワとも) の都において、統治者にして、トゥーパーヨウンゼーディ [仏塔] (ဓမ္မဝိမ္ဗူဝေဓီ) の寄進者である、ナラパティザー (နရပတိဇာ) 王の治世期に、將軍大臣 (သေနာပတိ-အမတ်ဇာ) が要請して、*Saddhammapāla-sīrimahādhammarājaguru* 師が造った。

[*Piṭaka*. p.54]

Sāslc には、トゥーパーヨウンゼーディー仏塔の寄進者であるナラパティヂー王が Sakkarāja 暦 844 年 (A.D.1482) にアワで即位したと、その治世期における仏教に関する出来事を述べる箇所 [Sāslc. pp.141ff. ; Cf. 池田 2007. pp.221ff.] が存在するものの、Saddhammapāla のことも、Nett-ṭ の述作に関することも、まったく触れられていない。

Sāsv には、Kaliyuga 暦 804 年 (A.D.1442) に、Mahānarapati (=ナラパティヂー) 王が Ratanapura-nagara (=アワ) において即位し、Thūpārāma-cetiya (=トゥーパーヨウンゼーディー) を建立せしめたことや、同時代に活躍した Ariyavaṃsa 長老のことが語られている [R^c pp.95ff. ; Cf. 生野 1980. pp.205ff.] が、Sāslc と同様に、Saddhammapāla や Nett-ṭ のことは語られていない。

Sāslc と Sāsv において Saddhammapāla と Nett-ṭ のことが言及されていない理由は不明である。

Piṭṣ は、Nett-ṭ はナラパティヂー王の時代に造られた、としている。この王の即位年は、Sāslc には A.D.1482 とあり、Sāsv には A.D.1442 と述べられているが、後者のほうが正しいようである⁽¹⁵⁾。この説に従えば、Nett-ṭ の著述年代は A.D.15c ということになる。しかしながら、Nett-ṭ の末文と結偈によれば、述作年は A.D.1564 であり、本註釈書は A.D.16c に属することになる。

それでは、Nett-ṭ の著述年として、どちらの説を妥当と見うるであろうか。Nett-ṭ の末文には “saddhammapālanāmena mahādharmarājagurunā mahātheranaracitā” との一文があり、これは著者本人が書く文としては不自然であろう。本人が書いたのであれば、このような表現は用いず、1 人称の代名詞を使うと思われる。これに対して結偈は、そこに “...racitaṃ mayā” とあり、これは著者の自筆と考えられる。ゆえに、その結偈に見られる述作年は Saddhammapāla 本人が記したものと思われる。となれば、信頼に値しうるのは Nett-ṭ の結偈の年月日と言える (末文に言われているそれと同一であるが)。Nett-ṭ がナラパティヂー王の時代に造られた、とする Piṭṣ の説明は誤解と評さなければなるまい⁽¹⁶⁾。

それでは、A.D.1564 が Nett-ṭ の制作年であるとして、その序偈・結偈に見られる “Mahādharmarāja” とは誰を指しているのであろうか。筆者は、「マハーダマヤーザー (မဟာဓမ္မရာဇာ)」と呼ばれていたタウンゲーの王ミンイエーティーハトウ (မင်းရဲထိုက်) ⁽¹⁷⁾ ではなかろうかと考える。

Saddhammapāla については、このミンイエーティーハトウの師であったと推定する。Piṭaka. の註記には、前任のタウンゲー王であったミンイエーテイン

(120) ミャンマーで造られた Nettipakarāṇa の註釈文献ならびに逐語訳について (古山)

カトゥー (မင်းရဲသီလဝံ) の時代に “Saddhammapāla Mahārājaguru” との称号を得て師となった、とあり⁽¹⁸⁾、これによれば、ミンイエーティンカトゥーの師であったということになる。むろん、代が変わっても王師として活躍し続けた可能性はあるであろうから、先述の筆者の推定が否定されるわけではない。

Nett-ṭ は、Anantasuti 大臣が Saddhammapāla に Nett の註釈書を書くよう要請したことで造られた。Anantasuti は、ミンイエーティーハトゥーに仕えていた者であろう。Piṭṣ には將軍大臣とあったので、軍人であったのかもしれない。このことは、A.D.16c には、在家者である王宮の高官 — それは教養人に数えられる人間であろう — の中にも、Nett の価値・意義を認める人物がいたことを示唆する。

5. Nett の古逐語訳 (No.526)

次に、No.526 の古逐語訳 (နိဿယောဒ) であるが、Piṭṣ には、「シン・ティーラウンタ (ရှင်သီလဝံ, = Sīlavamsa) 造」とあり、次のように述べられている。

Sakkarāja 暦 804 年 (A.D.1442) に、ヤダナープーラ (ရတနာပူရ, = Ratanāpūra) なるアワ (အဝ, インワとも) の都において王位に就いた、シッカイン (စင်ကိုင်း) 都のトゥーパーヨウンゼーディ [仏塔] (ဓမ္မရုံစေတီ) の寄進者である、ナラパティザー (နရပတိဇာ) 王は、11 年間統治した。[ティーラウンタは、] Sakkarāja 暦 815 年 (A.D.1453) に、タウンドウインザー (တောင်ထွင်းကြီး) 都の地方行政区画があり、[そこの] 中心街⁽¹⁹⁾で生まれた。そして、[ティーラウンタが] シッカイン都のヤダナーベイマーン (ရတနာပိမာန်) 寺において修行生活を送っている間のこと、[すなわち] Sakkarāja 暦 863 年 (A.D.1501) にヤダナープーラなるアワ都において王位に就いたシュエナンチョウシン (ရွှေနန်းကြောရှင် : 優美な黄金宮殿の主) なるバイン・ナラパティザー・ミン (ဘုရင်နရပတိကြီးမင်း) の治世期に、幼名がマウンシュエニョー (မောင်ရွှေညို) で、僧名をシン・ティーラウンタ (ရှင်သီလဝံ) といい、称号が “Sīlavamsadhaja Mahārājaguru” である、[この] 師が編纂なされた。[Piṭaka, p.92]

Sās1c には、Sakkarāja 暦 842 年 (A.D.1480) にミンガウン 2 世 (ဒုတိယမင်းခေါင်) 王が即位したこと、その治世期にタウンドウインザーからシン・マハーティーラウンタ (ရှင်မဟာသီလဝံ, = Mahāsīlavamsa) がやって来たため、トゥーパーヨウンパ

ヤー〔仏塔〕(トゥーパーヨウンゼーディのこと)のやや東北にあるヤダナーベイマーン寺を寄進してそこで典籍を教授させたこと、このシン・ティーラウンタが Nett の逐語訳 (၈၈၅၅၀၀၀) と『彼岸道物語』 (၀၇၀၅၀၀၀၀, = *Parāyanavatthu*。※ミャンマー語による現存最古の物語文学と言われる)を編纂したことが、述べられている [Sāslc. pp.146-147.; Cf. 池田 2007. pp.228-229]。

Sāsv には、Kaliyuga 暦 842 年 (A.D.1480) に、Ratanapura (=ヤダナープーラ) において、Siridhammarājādhipati という名の 2 世王 (dutiyaādhipa-rāja, = ミンガウン 2 世) が即位し、この王の時代に Pabbatabbhantara-nagara (= タウンドウインダー) 出身の Mahāsīlavamsa (= マハーティーラウンタ) という名の長老がいたこと、同 845 年 (A.D.1483) に Mahāsīlavamsa が Ratanapura にやって来て、Thūpārāmacetiya (= トゥーパーヨウンゼーディ) の近くのある場所にあった Ratanavimāna-vihāra (= ヤダナーベイマーン寺) に住まわせたこと、Nettipāli の atthayojanā⁽²⁰⁾ と『彼岸道物語』 (*Parāyanavatthu*) をミャンマー語で造ったことが、述べられている。また、Mahāsīlavamsa に関して、同暦 815 年 (A.D.1453) に生まれ、30 歳の時に Ratanapura にやって来たことが、諸々の古い書物 (porāna-pothaka) に述べられている、とも記されている [R° pp.98-99.; Cf. 生野 1980. p.211]。

Piṭṭh では Nett の逐語訳はシュエナンチョウシン王 (A.D.1501-1526) の時代に造られたとするが、Sāslc では、その父親である、ミンガウン 2 世王 (A.D.1480-1501) の時代に造られたとしている。

Sāsv においては、制作年代は不明であるが、諸々の古い書物の記録として、ティーラウンタの生年とヤダナープーラ来訪年が紹介されていた。Nett の逐語訳は、その時に降に造られたとすると、いずれの王の治世期にも該当する。

ゆえに、この逐語訳の制作年は大まかにしか分らない、と言うほかはない。ただし、『彼岸道物語』は A.D.1501 に造られたとのことである [Cf. 文学史. pp.64-65]。Sāslc および Sāsv において、典籍を挙げる順序は、Nett の逐語訳が先で、『彼岸道物語』は後である。この順序が述作の先後を反映したものであるとするならば、この逐語訳は A.D.15c 終わり頃に造られたということになるであろう。これは、ミャンマーにおける最初の Nett の逐語訳である。

ちなみに、ティーラウンタは、仏典叙事詩 (၈၆) の作者として名高い [Cf. 文学史. pp.47-58]。Sāslc には、ミンガウン 2 世が即位年に結界処を設けた時に、その羯磨式に、他の比丘たちから反対意見が出されてティーラウンタは招かれなかったことが伝えられている。その理由は、彼が、釈尊が禁じた「歌詠み」を

(122) ミャンマーで造られた Nettipakarāṇa の註釈文献ならびに逐語訳について (古山)

事とする比丘であるとされたからであった [Sāslc. p.148 ; Cf. 池田 2007. pp.232]。しかしながら、ティーラウンタは、詩作にのみ耽っていたわけではなく、Nett の翻訳を自発的に造ろうとするほど Nett に関心を寄せ、その逐語訳を完成することの出来た、大学僧の 1 人でもあった。

6. Nett の古逐語訳 (No.527)

No.527 の古逐語訳については、Piṭs に「ボウバーヨウン・セアロー (ပုဗ္ဗာရုံဆရာတော်) 造」とあり、次のように述べられている。

Sakkarāja 暦 1076 年 (A.D.1714) に、ヤダナープーラ (ရတနာပူရ, = Ratanāpūra) なるアワ (အဝ, インワとも) の都において王位に就き、“Siripavara Mahādhammarājādīrājā” なる称号を受けた、レーチュンマーンアウン (လေးကျွန်းမာရ်အောင်)、ゼーヤマーンアウン (ယေမာရ်အောင်)、マハーミンガラーマーンアウン (မဟာမင်္ဂလာမာရ်အောင်)、ローカマーンアウン (လောကမာရ်အောင်)、という [4 つの] ゼーディ (ဧတီ, = cetiya : 仏塔) の寄進者である、マンナンシンビューシン (မုန်နန်းဆင်ဖြူရှင်) という名の、日曜日生まれの王の御代に、パカンヂー (ပုခန်းကြီး) 都の、ボウバーヨウン・セアローことシン・ターラダッティ (ရှင်သာရဒဿီ, = Sāradassī) が編纂した。[Piṭaka. p.92]

ただし、Piṭaka. の註記⁽²¹⁾ には、〈[この逐語訳は] マニターラミンズー (မင်္ဂလာရုံမင်း, = Maṇisāramañjū) 尊者が依頼し [て造った] ので、[Sakkarāja 暦]1121 年 (A.D.1759) に編纂した。[その時代は] アラウンミンタヤー (အလောင်းမင်းတရား) の御代になっていた。マンナンシンビューシンの御代に造ったのではない〉[Piṭaka. p.92] とあり、制作年について誤りのあることが指摘されている。制作年については議論の余地があるやもしれないが、ひとまず A.D.18c 前半頃と言えるであろう。

Sāslc には、該当する時代の箇所には Nett の逐語訳が造られたとする記述が見当たらないが、パカンヂー都のシュエウミン (ရွှေမင်း) 長老系統の比丘について述べている箇所に、ネーイン村 (နေရင်းရွာ、マグエ管区パコックー県にある村で、ミンジャンのエーヤーワディー河対岸に位置する) のボウバーヨウン [寺] の僧が Nett 聖典の逐語訳 (နေတ္ထဝါဒ်တော်နိဿယ) など⁽²²⁾ を編纂したとある [Sāslc. p.179 ; Cf. 池田 2007. pp.273-274]。

Sāsv についても Sāslc と同じく、Mūlāvāsagāma (= ネーイン村) の Pubbārāma-

vihāra (=ポウバーヨウン寺) の住僧が、Nett 聖典の語義をミャンマー語により列挙した (nettīpālīyā ca attham maramabhāsāya yojesi) とある [R^o p.116 ; Cf. 生野 1980. p.246]。

Sāslc と Sāsv に見られるこの Nett の逐語訳が Piṭs のそれと同一かについては、判断の根拠となりうる制作年が両書に述べられていないため、何とも言いようがない。ただし、M.H.Bode は、このネーイン村のポウバーヨウン寺の僧の名を “Saradassi” とし、これを同一視している [PLB. p.56]。また、Kanai Lal Hazra もこの見方を踏襲している [BPML. p.74]。

制作の経緯であるが、Piṭs の註記によれば、モニターラミンズー尊者の要請で造られたようである。その要請の理由や、先行する A.D.15c のティーラウンタによる逐語訳との関わりなどを知ることができれば面白いが、この逐語訳の原本を見ていないので目下のところ不詳である。

7. Nett の古逐語訳 (No.528)

No.528 の古逐語訳については、「ンガタヨウ・セアロー (ငမ္မေရ်ဆရာတော်) 造」とあり、次のように述べられている。

シッカイン (စိန့်ခိုင်) 都の地方行政区画のンガタヨウ (ငမ္မေရ်) 村の出身である、ンガタヨウ・セアローが編纂した。[Piṭaka. p.93]

この記述には、〈パカンヂー (ပုသိမ်မြို့) 都の東にあるンガタミョウ (ငမ္မေရ်) 村のカンルツシュエ (ခလွတ်ရွှေ) 寺に住まうウンタービリンガーヤ (ဝံသဘိလင်္ကာရ, = Vamsābhilankāra) 大長老がエーカサーヤーリンガーヤ (ဧကရာလင်္ကာရ, = Ekacārālankāra) 長老に依頼したため、編纂した。[Sakkarāja 暦] 1111 年 (A.D.1749) カソン月白分 5 日目に終わった〉[Piṭaka. p.93] との註記 (※本稿註(21)参照) が付されている。

Sāslc と Sāsv には、この逐語訳と思しき典籍の制作に関する記述は見当たらないようである。

制作年は、目下のところ上引の註記により知るほかない。この逐語訳が A.D.1749 に造られたとなると、No.527 のそれよりも古いということになる。ただし、両逐語訳の制作年には大きな時間の隔てはなく、同時期と言ってよい範囲である。この時期は、Nett に対する関心が学僧たちの間で高かったのであろう。

(124) ミャンマーで造られた Nettipakarāṇa の註釈文献ならびに逐語訳について (古山)

8. Nett の新逐語訳 (No.529)

No.529 の新逐語訳であるが、「パヤーヂー・セアロー (ပုထိုးဆရာတော်)」とあり、次のように述べられている。

Sakkarāja 暦 1221 年 (A.D.1859) にマンダレー (မန္တလေး) なるヤダナーボウン (ရာဇာဝံ) 都の王宮を造営し、“Siripavara Vijayānantayasa Paṇḍita Tribhavanādityādhīpati Mahādharmarājādhīrārā” なる称号を受けた、マハーローカマーンジン (မဟာလောကမာရိန္ဒ) というゼーディー (စေတီ, = cetiya : 仏塔) の寄進者である王の御代に、シュエピーヤンアウン (ရွှေညောင်အောင်) の西側のガピュー (ကျုံ) 村出身の僧名シン・ザーガラ (ရှင်ဇာဂရ, = Jāgara) がいた。そして、マンダレーなるヤダナーボウン御都城の南方にある、マハームニ御仏像の南のデッキナーヤーマ寺 (ဒက္ခိဏာရာမဝိုက်, = Dakkhinārāma) に住まう、[かのシン・ザーガラ、すなわち] Jāgarābhivaṃsadhaja Tipiṭakadhara Mahādharmarājādhi Rājaguru 師が編纂された。[Piṭaka. p.93]

この記述への註記 (※本稿註21参照) には、〈仏暦 2398 年、Sakkarāja 暦 1216 年 (A.D.1854) ピヤット一月白分 5 日目に、1 日で編纂し終わった。Sakkarāja 暦 1209 年 (A.D.1847) にデッキナーヤーマ寺を建立した。[この寺の] 寄進者は、内米倉奉行大臣 (ကျိအတွင်းမင်းကြီး) で、称号として「大長寿を保証された者 (= 王に処刑されない者、မဟာသင်္ကတော်ရှည်)」との称号を授与された、ウー・パワー (ဦးဖူး) であった [Piṭaka. p.93] とある。

Sāslc はその著述年である A.D.1832 以後の出来事は記されていないため、ここからこの新逐語訳に関する情報を得ることが出来ない。また、Sāsv には、この新逐語訳に関する言及は見られない。

この場合も、制作年は、目下のところ上引の註記により知るほかない。コンバウン王朝末期のミンドン王治世期に属する。翻訳者は、その称号に “Tipiṭakadhara” とあることから分かるように、三蔵憶持の大学僧であった。

9. Peṭ の逐語訳

次に、Peṭ の逐語訳については、Piṭs に、「著者名不詳」とあり、次のように述べられている。

いかなる Sakkarāja 暦 [の年] において、いかなる王の治世期に、いかな

ミャンマーで造られた Nettipakarāṇa の註釈文献ならびに逐語訳について (古山) (125)

る師が編纂したのかということ [について]、結語 (နိဂမ္မိကံ P.nigamana) においてははっきりと語っていない。[Pitaka. p.93]

この文に註記が2つ付されており、まず〈〔Sakkarāja 暦〕1168年 (A.D.1801) にピャーターツ・セアロー (ပြာသာဒ်ဆရာတော်) になるアシン・ターラダッティー (အရှင်သာရဒဿီ, = Sāradassī) が御編纂なされた〉(※根拠について本稿註(21)参照)とあり、〈ピャーターツ寺のセアローなるターラダッティーは存在した〉(※根拠は大学中央図書館版)とある [Pitaka. p.93]。この註記の根拠がいかなる文献に基づいているかは筆者には分からない。Piṭṣ の著者がこの逐語訳の結語に著者や年代について何も語られていない、と述べている以上、その文献とは少なくともこの逐語訳それ自体ではないであろう。

Sāsle と Sāsv には、Peṭ の逐語訳に関する記述は見られないようである。

この逐語訳が造られた年が A.D.1801 であるとして、Piṭṣ や Sāsle、Sāsv を見た限り、それ以前の時代に Peṭ の逐語訳が造られたとする記述がないことを考えると、この逐語訳はミャンマーにおいて最初の Peṭ の翻訳ということになる。Nett の逐語訳は A.D.15-16 には造られていたが、Peṭ のそれは A.D.1801 とされ時期が晚い。その理由は不明であるが、Peṭ は Mahākaccāna の直説ではなく2次的な関係典籍とする見方 (脚註(9)参照) がミャンマーに古くからあったとするならば、そのような見方が関係して、Peṭ の逐語訳が然程待望されなかったのではなかろうかと想像することもできる⁽²³⁾。

なお、この逐語訳の作者ターラダッティーは、「ピャーターツ寺のセアロー」とされるので、No.527 の Nett の古逐語訳の作者とは別人と見るべきであろう。

10. *Netti-aṭṭhakathā* の逐語訳

Netti-aṭṭhakathā (以下 Nett-a) は、大凡 A.D.5-6c 頃に活躍したとされる大註釈家 Dhammapāla による、Nett に対する1次的義疏であり、現存最古の註釈書である。この註釈書については、拙稿「Nettipakarāṇa の註釈文献について」において触れているので、それを参照していただきたい。

Nett-a の逐語訳については、Piṭṣ に、「シン・タダマナンディ (ရှင်သဒ္ဓမ္မနန္ဒီ, Saddhammanandi) 造」とあり、次のように述べられている。

Sakkarāja 暦 1144 年 (A.D.1779) にアマラプーラ (အမရာပူရာ, = Amarapūra) なる都

(126) ミャンマーで造られた Nettipakarāṇa の註釈文献ならびに逐語訳について (古山)

の王宮を造営し、“Siripavara Vijayānantayasa Paṇḍita Tribhavanādityādhīpati Mahādharmarājādhīrārā” なる称号を受けた、アウンミューローガ (အောင်မြေလောက) というゼーディー (ဧတိယ, = cetiya : 仏塔) の寄進者である王の御代に、パカンヂー (ပုဂံမြို့) 都の北側のチャウンガウツ (ချောင်းကောက်) 村出身のシン・タダマナンディが編纂した。[Piṭaka. p.109]

この記述への註記 (※本稿註(21)参照) には、〈[Sakkarāja 暦] 1135 年 (A.D.1773) のカソン月満月に、4 日編纂して完成した〉[Piṭaka. p.109] とある。

Sāsle と Sāsv には、Nett-a の逐語訳に関する記述は見られない。

Nett-a は Nett 学習のための重要典籍と言えるが、その逐語訳の制作年は、本典の逐語訳が造られた時代からしばらく経ており、時期が晚いと評しても過言ではなからう。ただし、本典である Nett の逐語訳を制作する際には Nett-a が参照されていたであろうし、Nett-a における釈義は訳文に反映されたと考えられるため、Nett の逐語訳があれば、Nett-a のそれがなくとも事足りたのかも知れない。

注目すべき点は、Nett-a の逐語訳がパカンヂー出身の比丘により造られたということである。このパカンヂー (マダガスカル県) は、No.527 の古逐語訳 (A.D.18c 前半頃) が造られた場所である。また、No.528 (A.D.18c 中頃) の古逐語訳もパカンヂーの比丘の要請で造られたと言われている。Sāsle と Sāsv は、A.D.18c に活躍したパカンヂー (=Kukhana-nagara) 出身のニャーナワラ (ရှင်ဇော်ဝံ၊ = Nāṇavara) の事跡を伝えているが、この学僧は Nett に通じた人物であったようである [Sāsle. pp.183-184 ; Cf. 池田 2007. p.282 / Sāsv R^e p.121 ; Cf. 生野 1980. p.255]。パカンヂーには Nett の学習・研究を特に重んずる雰囲気があり、学統のごときものも形成されていたのではなかろうかと推察される。そして、これらの Nett-a の逐語訳は、そのような流れの中で造られたのではないかと想像される。

11. むすび

以上、ミャンマーで造られた Nett の註釈文献ならびに逐語訳について、Piṭs を中心に、Sāsle および Sāsv をも参照しつつ、作者、述作の年や場所、経緯などの情報を示した。

ミャンマーには少なくとも A.D.13c には Nett が伝えられていた (註(1)参照)。そのミャンマーにおいて本格的な Nett の研究が生まれたのは、最古の逐語訳

(No.526) が造られた A.D.15c と言える。同世紀の半ば頃に Ariyavaṃsa が著した *Maṇisāramañjūsā* には、Nett の難解語句釈の書 *Nettipakarāṇa-gaṇḍhi* からの引用文があるが(註(8)参照)、このこともまた、この時代に Nett に関心を寄せる学僧のいたことを示唆する証左になりうるかと思われる。

その研究の関心は、A.D.16c に入ると、一部の学僧の間に広がったようである。Sāslc の A.D.16c に活躍したティターダナダザ師(ရှင်တိတာသနဓဇ)の事跡・行状を述べる箇所には、ティターダナダザがタウンドウイン都を訪れた時、その都で教法を教えていたオウッタマヂョー師(ရှင်ဥတ္တမဇ္ဇော)は *Netti-ṭīkā* を見て悩んでおり、やって来たティターダナダザの学識をはかるため、彼に *Netti-ṭīkā* を渡して翻訳させた云々とある [Sāslc. pp.151ff. / Cf. 池田 2007. pp.236ff. / ※ Sāsṅv には無い]。また、ティターダナダザの孫弟子マハーヤダナーガラ師(ရှင်မဟာရတနာယရ, = Mahāratanāghara) が Nett に通じていたと解することの出来る記述も見られる [Sāslc. p.158 / Cf. 池田 2007. p.243 / Sāsṅv R^c p.102 / Cf. 生野 1980. p.220]。そして、この時代には Nett-ṭi が造られている。

Piṭṣ に挙げられる関連典籍の制作年という見地から考えると、ミャンマーにおいては、A.D.18-19c に Nett 関連の文献が多く造られており、この時期はミャンマーにおける Nett 研究の黄金期と評することが出来よう。特にパカンデーには Nett の学習・研究を重んずる雰囲気があったようである。

(2012 年 7 月 20 日脱稿)

参照・引用文献とその略号

R^c: London/Oxford Pali Text Society (PTS) 版

B^c: ミャンマー第 6 回結集版

BACS.: Kanai Lal Hazra. *The Buddhist Annals and Chronicles of South-East Asia*. New Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers Pvt. Ltd. 2002.

BPML.: Kanai Lal Hazra. *Buddhism and Pali Literature of Myanmar*. Delhi: Buddhist World Press. 2011.

GPL.: Asha Das. *The Glimpses of Pali Literature (Gandhavaṃsa)*. Culcutta: Punthi Pustak. 2000.

HHPL.: Oskar von Hinüber. *A Handbook of Pāli Literature*. Berlin. Walter de Gruyter & Co, 1996.

HTBS.: Kanai Lal Hazra. *History of Theravāda Buddhism in South-East Asia*. New Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers Pvt. Ltd.. 1981.

MLMS.: သန်းထွန်း (Than Tun). *မြန်မာသမိုင်းလစ်ကွက်များ (Missing Links in Myanmar Chronicle)*. Yangon: မိုးရွေးစာပေ. 2003.

Piṭaka.: မင်းကြီးမဟာသိရိဇေယသု . *ပိဋကတ်သုံးပုံ စာတမ်း ခေါ် ပိဋကတ်တော်သမိုင်း*. Yangon: ရဲပြည်--စာအုပ်တိုက်. 2002 (6th ed.).

PLB.: M.H.Bode. *The Pali Literature of Burma*. Rangoon: Burma Research Society. 1965.

(128) ミャンマーで造られた Nettipakarāṇa の註釈文献ならびに逐語訳について (古山)

Ray.: Niharranjan Ray. *An Introduction to the Study of Theravada Buddhism in Burma*. Bangkok: Orchid Press. 2002(Rep.).

Sāslc.: မဟာဓမ္မသင်္ကြံ, သာသနာလင်္ကာရစာတမ်း. Yangon: ဟံသာဝတီပိဋကတ်ပုံနှိပ်တိုက်. 1956.

生野 1980.: 生野善應『ビルマ上座部仏教史』、山喜房佛書林、1980 年

池田 2007.: 池田正隆『ミャンマー上座部仏教史伝『タータナー・リンガーヤ・サーダン』を読む』、法蔵館、2007 年

片山 1974.: 片山一良『『パーリ語文献史』和訳・索引 (GANDHAVAMSA)』『佛教研究』4、1974 年
文学史: ウー・ペーマウンティン著、大野徹監訳『ビルマ文学史』(東南アジアブックス 109 ビルマの文学 16)、井村文化事業社、1992 年

緬甸史: G.E. ハーヴェイ著、東亜研究所訳『緬甸史』、東亜研究所、1944 年

BED.: A. Judson. *Burmese-English Dictionary*. Revised and Enlarged by Robert C. Stevenson. Rangoon (Yangon): Government printing Burma. 1893.

BMDGF.: John Okell & Anna Allott. *Burmese / Myanmar Dictionary of Grammatical Forms*. Richmond (UK): Curzon Press. 2001.

MED.: *Myanmar-English Dictionary*. Ed. Department of the Myanmar Language Commission, Ministry of Education, Union of Myanmar. Yangon, 2002.

PMD.: ဦးဟုတ်စိန်, ပဒတ္တဓမ္မသာ ဟူသော ပါဠိ-မြန်မာအဘိဓာန်. Yangon: ပိဋကဗျာအဖွဲ့ & ချစ်သာစာပေ. 1999.

ビルマ: 大野徹『ビルマ (ミャンマー) 語辞典』、大学書林、2000 年

緬華: 陳孺性 編『模範緬華大辞典』、東洋文庫、1970 年 (復刻版)

註

- (1) E.Hardy は、Nett は Anurādhapura の Mahāvihāra (大寺) に住まう者たちが伝承してきた正典 (*canonical books*) の一部とされてない、と述べている [Nett R^e vii-viii]。拙稿「Nettipakarāṇa の末文に対する Netti-atthakathā での説明について」『駒澤大学仏教学部論集』38、2007 年の中で述べたように (pp.468-467 脚注(2))、Buddhaghosa (A.D.5c 頃) による *Samantapāsādikā* の Bāhiraṇidāna-kathā における三蔵リストと、『善見律毘婆沙』(僧伽跋陀羅訳、A.D.5c) 対応部と思われる箇所を見ると、Nett や Peṭ は小部 (屈伽迦、狭義の「経蔵小部」のこと) に挙げられていない。

しかしながら、ミャンマー (ビルマ) においては、Nett を小部に収録した。M.H.Bode は、ビルマの伝統 (*Burmese Tradition*) は小部の古伝 15 書に *Milindapañha*、*Suttasaṅgaha*、*Peṭ*、Nett を加え、これらはその分析 (*analysis*、釈義) と諸聖典からの諸引用句の解釈 (*explanation*) のために研究された、と述べている [PLB. pp.4-5]。

ミャンマーにおいていつ頃から Nett が経蔵小部に収められたのかは分からない。A.D.1223 の年代記載のあるバガンの Singha Vīr Surijapui Inscripton (A.D.1785 に Badon 王が書写させたもの) には、背面 10 行目から 11 行目にかけて、“...ခုဒ္ဒိကာယံ ဂုဏ် || ပါတိ အဋ္ဌကထာ နေတ္တိပိကာယံ ဂုဏ် || မိလိန္ဒပဉ္စာ ||...” (Trans.: ...29 works of Khuddanikāya, 2 works of (original text in) Pali and Athakathā of Nettippakuir, Milindapañhā, ...) [MLMS. p.33; 英訳部 p.22] とあり、ここでは、Nett を指していると考えられる“နေတ္တိပိကာယံ” (Nettippakuir) は、小部とは別に言及されている。ゆえに、A.D.13c 頃には、ミャンマーにおいて Nett は経蔵小部には収められていなかったのではなかろうかと思われる。Bhikkhu Bodhi は、Nett と Peṭ はビルマにおいて最近になって経蔵に収められた、と述べている (Bhikkhu Bodhi.

Mahā Kaccāna, Master of Doctrinal Exposition. Kandy: Buddhist Publication Society, 1995. p.43)。ミャンマーの第6回結集 (A.D.1954-1956) において編纂された三蔵においては、小部中に Nett, Peṭ, Milindapañha の3書が収められた (芳村修基『仏教教団の研究』、百華苑、1968年 pp.512-517)。

- (2) “နိဿယ” (“နိဿ”や“နိဿယ”などと書かれることもあるようである) とは、パーリ語の “nissaya” を語源とする語であり、“word-by-word translation of Pali texts” [MED. p.239b]、すなわち「聖典逐語訳」を意味する。パーリ語聖典の本文を、単語に分解して、単語ごとにミャンマー語訳をほどこしてゆく形式の翻訳を指す。この“နိဿယ”に関する詳しい論考には、John Okell による ‘Nissaya Burmese’ *Indo-Pacific Linguistic Studies (Lingua 15)*, 1965. および ‘Nissaya Burmese: A Case of Foreign Grammar and Syntax.’ *Journal of The Burma Research Society* 50, 1967. があると聞いているが、残念ながら目下のところ筆者は未見である。
- (3) 筆者が2005年にミャンマーを訪問した際に、Nettīhārabodhi と題される、151頁のミャンマー語の小冊を入手した。著者は Guṇissara という名の、ミャウンミャのပဉ္စောတာရုံကျောင်းတိုက်に住する学僧比丘 (Dhammācariya, Pālipāragū) である。2001年にヤンゴンのသစ္စာမဏ္ဍိုင်စာပေを版元として出版された。同書は Nett における 16 hāra の要点を解説するものであり、註釈書の類と評してよい。ミャンマーにおいては、このような書が現代においもお著されている。

ちなみに、同書の前書きには、参照資料として、①ဝိသုဒ္ဓိရုံ နေတ္တိဟာရတ္ထဒီပနီသင်္ဂ (ウィットウダーヨウンの『ネッティ・ハーラの意味の新註解』)、②သုံးချက်စုဘာသာနိကာယ နေတ္တိလင်္ကာအကောရ် (『三論集成のバーダーディーガー (逐語註)』) とともに『ネッティのリンガー (詩句?) の語句釈』、③ပဉ္စောတာရုံကျောင်းတိုက်〔僧院〕の師匠たちの〔研究〕蓄積、④Candamukhābhivamsa による手書き文書のနေတ္တိဟာရဝိတမ်း (『ネッティ・ハーラ記』) が列記されている。①②④について、いずれも造られた年代は分からないが、然程古いものではないと想像される。

ところで筆者は、かつて北九州・門司の世界平和バゴダに住していた、ミャンマーの学僧 Vepulla 師 (Aggamahāpaṇḍita, 2004年1月2日入寂) が、1999年11月4日に駒澤大学を訪問した際に質問をする機会を得て、現在のミャンマーにおいて Nett はどのくらい読まれているのか、と尋ねた。そのとき、同書について、Vepulla 師より、「Nett はとても難しいが、Nett を読めば三蔵が全部分かる」との説明をうけた。このようにミャンマーに Nett の有用性を認める学僧が存在することが、今日に至るまで Nett 研究の伝統を保持している所以ではなからうかと思われる。

なお、Nett の聖典解釈法は、Aṭṭhakathā における註釈法とは性格を異にするものとして受け止められていた。このことについては、拙稿「[tīkā 文献における pakarāṇa-naya 及び netti-naya について]」『印度學佛教學研究』53-2、2005年の中で述べている。

- (4) 既刊の拙稿「Nettipakarāṇa の註釈文献について」(次註参照) において、筆者は Piṭṭ すなわち『ピタカッタタマイン』を (1906年にミャンマーで著された仏教書目録) (p.440) と述べた。Kanai Lal Hazra もするように述べている [BPML. p.89]。しかしながら、著者のမင်းကြီးမဟာသီရိဇေယျ (ミンザーマハーティリゼーヤトゥー) の生没年は A.D.1815-1891 のようである。ゆえに、A.D.1906 は初版の発行年であり、著述年ではないのではなからうかと思う。ここでは、「A.D.19c にミャンマーで著された仏教書目録」と大雑把に捉えておきたい。
- (5) 筆者の一連の論考とは以下を指す：「パーリ四部ティーカに現れる nettiyaṃ の語を含む引用文」『佛教研究』(浜松・国際仏教徒協会) 34、2006年；「Nettipakarāṇa の註釈文献について」『駒澤大学仏教学部論集』37、2006年；「Nettipakarāṇa の末文に対する Netti-aṭṭhakathā での説明について」『駒

(130) ミャンマーで造られた *Nettipakarāṇa* の註釈文献ならびに逐語訳について (古山)

澤大学仏教学部論集』38、2007年：「*Nettipakarāṇa* の末文とその受容について」『駒澤大学仏教学部論集』40、2009年。Nett に関する主要な拙稿に関しては、「*Nettipakarāṇa* の末文とその受容について」をご覧ください (p.380 脚注(6))。

- (6) 外来的な文献との関係を示唆する要素としては、Nett に引用される典籍の出所や、パーリ仏教では標準的に説かれなないと考えられる教理術語が見られること、が挙げられる。詳細は、拙稿「*Nettipakarāṇa* の末文に対する *Netti-aṭṭhakathā* での説明について」(前註)を参照されたい。
- (7) Oskar von Hinüber は、Nett にはテラワダの三蔵にトレースできないような引用文があることと、Nett におけるいくつかの引用詩句は差し当たって根本説一切有部 (*Mūlasarvāstuvāda*) のテキストにトレースされるということを理由に、〈Nett はテラワダの伝統にまったく根ざしていない〉 (... *Nett is not based exclusively on the Theravāda tradition* ...) と述べ、さらに、〈Nett はパーリ語文献においてはまったく特異なものである〉 (... *which is quite unusual Pali literature.* ...) とも述べている [HHPL. p.80]。
- (8) ミャンマー撰述のパーリ文献史書である *Gandhavaṃsa* (A.D.16c) には、*Nettipakarāṇa-gaṇḍhi* という名の難解語句釈 (*gaṇḍhi*) の書が挙げられている (Cf. 拙稿「*Nettipakarāṇa* の註釈文献について」pp.442-443)。この難解語句釈は、現存しないが、A.D.1466 にミャンマーで Ariyavaṃsa が著した *Maṇisāraṃaṇḍī* に引用と思しき文がある (B^e 1.55) ため、A.D.15c 半ば頃にはミャンマーに存在していたと思われる。しかしながら、Piṭṭha にはその名が見当たらず、Sāsle と Sāsṅ にも見つからない。
- (9) なお、ミャンマー撰述ではない①～④に関しては、Piṭṭha において、次のように述べられている。

① Nett (နက္ခိယဝိသေသ, No.39) : [Mahākaccāna 尊者は] Ujjeni へ Tiriṭṭivacca 婆羅門と Bhaddaparamā 婆羅門女とが結婚して生まれた子となった。金色と等しい [容] 色を有していたので、Kaccāna という名をこの者になづけた。次の年齢期に至ると、Ujjeni において、統治者の Sucandapajjota 王の輔師となった。輔師になったあと、出家して、阿羅漢となった。阿羅漢となったあと、略説 (အကျဉ်း) を御説法なされるときに [その] 御教えを広説して説く地位の最高位 (ဇောဒဂ် : 是第一) を得たので、この Nett を御説法なされた [Piṭaka. pp.38-39]。

② Peṭ (ပေတကပဒေသ ဝိသေသ, No.40) : 阿羅漢である ဟောကဋ္ဌဉ္စ (Mahākaccāna) 尊者が御説法なされたところの Nett に依拠して、阿羅漢である御尊者がたが御説法なされた。[この] “Petakopadesa” [という語] を “piṭaka + upadesa” と区切ることができるであろう。[この典籍名は] 「三蔵を指し示して教える書」を意味する。[Peṭ の] 註解書 (အဖွင့်အဋ္ဌကထာ) はない [Piṭaka. p.39] (※ Peṭ よりも Nett のほうが先行すること、Peṭ を Mahākaccāna の直説ではないとしていること、書名を piṭaka と upadesa に分解して依主釈のごとくに解していること、が注目される。Nett と Peṭ の新古に関する議論については、拙稿「“netti” と “Nettipakarāṇa”」『印度學佛教學研究』54-1、2005年に、書名の語義に関しては、拙稿「Petakopadesa は Peṭaka の upadesa (註釈) か」『佛教研究』32、2004年において論じているので、各々参照されたい)。

③ *Netti-aṭṭhakathā* (နက္ခိယဝိသေသ, No.162) : Dhammapāla 尊者がつくる [Piṭaka. p.48]。

④ *Netti-ṭīkā* (နက္ခိယဝိသေသ, No.130) : Dhammapāla 尊者がつくる [Piṭaka. p.53] (※ 著者の Dhammapāla について、ここでは③のそれと同一人物としている)。

- (10) 池田正隆「サーサナーランカーラ・サーダン (Sāsanaṅkāra cātām) : 一ビルマの仏教史に関する伝承の記録—9」『佛教研究』30、2001年 pp.150-151。なお、本稿で参照している池田 2007. は、

同氏による Sāsle の一連の和訳が 1 冊にまとめられて出版されたものである。

- (11) 池田正隆は“ဥဒါဟရန်ပိဋ်”(< P. udāharāṇa-pāḷi, udāharāṇa : *example, instance*) を「譬喩品」と訳している [池田 2007. p.307] が、Nett には譬喩品などという章は、A.D.1902 年に公刊された、ミャンマー文字貝葉写本を底本として校訂された PTS 版 (*India Office* 所蔵のミャンマー文字貝葉写本、*India Office* 所蔵の *Phayre Collection* のミャンマー文字貝葉写本、A.D.1894 年に Rhys Davids を経て W.Subhūti から贈られたシンハラ文字紙写本を底本としている) にも存在せず、ミャンマー第 6 回結集版にも見られない。A.D.19c のミャンマーに伝持されていた Nett にそのような章があったとも考え難いであろう。筆者 (古山) は、Nett において聖典解釈の実例を示す際に引用される聖典本文を指す言葉と解した。

ちなみに、池田正隆は、当該の語を含む“နေတ္တိကျမ်းတွင်ပါသောဥဒါဟရန်ပိဋ်ကိုအခြေအစွဲပြုလျက်မှတ်သားကြည့်ရှု၏”との文を、〈…『Netti 指導論』の中に含まれる譬喩品の註釈をしていました〉[池田 2007. p.307] と訳しているが、筆者は〈…Netti 書にある引用聖典を数目に基づいて書付けてみた〉の意に解した。

- (12) 池田正隆は、原文“…“…မဟာနိကာယ-ဟု ကမ္မည်းတပ် မှတ်ခေါ်ဝေါ်ကြသည်”を〈…『Mahāṭīkā 大復註』と碑文に呼ばれています〉[池田 2007. p.307] と訳しているが、筆者は〈…[人びとは] Mahāṭīkā と命名すると考えて [そう] 呼称した〉の意に解した。「人びとは」との補足語句は、複数動詞であることを示す“ကြ”があることによる [Cf. BMDGF. pp.16-17]。また、文中の“ကမ္မည်းတပ်”との語に関しては、緬華 p.33a に「命名する」の意であるとある。
- (13) 橘堂正弘『スリランカのパーリ語文献』、山喜房佛書林、1997 年 p.60 には、A.P.Buddhadatta の *Pāli Sāhityaya* に挙げられている *ṭīkā* や *anuttīkā* の書名が紹介されている。そこに *Nettipakarāṇa purāṇa-ṭīkā* (*Nettivibhāvanī, Līnattha-vaṇṇanā*) と *Nettipakarāṇa abhinava-ṭīkā* (*Peṭakālaṅkāra, Nettimahāṭīkā*) の 2 書の名が見えるが、いずれも「未出版」とされている。
- (14) Piṭaka. の脚注には、〈96 誦分 (bhāṇavāra) あるとの旨、မြင့်စော့ဆရာတော် (ミックウエー・セアロー、※人物不詳) が覚書をつくっている〉[p.54] とある。テラーワードの大部な修行マニュアル書の *Visuddhimagga* (『清浄道論』) は 58 誦分である (Cf. *Visuddhimagga B*° vol.2, p.355)。ゆえに、96 誦分という分量はかなり大規模であると言えよう。
- (15) 生野 1980. には〈Kaliyuga 暦 804 年 (A.D.1442) が正しいと思われる〉との註記が付されている [p.208]。ただし、在位年は A.D.1443-1469 とするようである (Cf. 服部正一「「インワ時代」(その三)」『大阪外国語大学学報』25 (文化編)、1971 年 pp.4-7)。
- (16) 拙稿「Nettipakarāṇa の註釈文献について」において、筆者は、Nett の PTS 版校訂者 E.Hardy が〈Mahādharmarāja 王の治世に、Samantapāla によりビルマで A.D.16c 後期の第 3 期間に編纂された〉[Nett R° pp.xxxv-xxxvi] と述べていること (作者名に問題あり)、Nett の PTS 版英訳の“*Translator's Introduction*”において、英訳者の Nāṇamoli が〈15 世紀(?)にビルマで書かれた復註 (ṭīkā) もある〉(According to Kaccāna Thera. *The Guide (Nettipakarāṇa). Translation Series, No.33.* Trans. Bhikkhu Nāṇamoli. London: The Pali Text Society, 1977. p.x) と言っていることに触れたが、このような年代に関する相違は、依拠している史料に原因があるのかもしれない。
- (17) 文学史. に〈マハーダンマヤーザー。(一五八四〜一六〇九)。タウンゲー宮殿を建て、金箔を施した。それで、シェナンティー王と呼ばれる。本名はミンイエーティーハトゥ。タウンゲーのミンガウン王の長男でナッシンナウンの父〉[p.490 (注 59)] とある。ただし、ミンイエーティー

(132) ミャンマーで造られた *Nettipakaraṇa* の註釈文献ならびに逐語訳について (古山)

ハトゥーがタウンゲー太守となったのは A.D.1548 であるので (Cf. 服部正一「インワ・タウンゲー時代」『大阪外国語大学学報』28 (文化編)、1972 年 p.73)、文学史の〈一五八四〜一六〇九〉というのは正しくないのではなかろうか。

- (18) 〈…この長老は、ヒンダーワディー (Hamsāvati、※バゴーのこと) のシンビューミャーシン・ミンタヤー (ဆဋ္ဌါဗျားရှင် ဓဇိတရား: 多くの白象を持つ正法王) の御父君である、ミンイエーテインカトゥーと呼ばれるタウンゲーの王のセアロー (師) であり、Saddhammapāla Mahārājaguru との称号を得て、セアローとなった) [Piṭaka. p.54]。
- (19) 原典には「ဧူလူငါး」とあるが、筆者には語義が詳らかではない。「ဧူလယ်ခေါင်」の誤記ではなかろうかと想像し、ひとまず「中心街」と訳しておいた。ゆえに再度検討を要する。
- (20) “*athayojanā*” とは“အနက်ကိုယှဉ်ခြင်း”すなわち「語義の列挙」を意味する [PMD. p.38b]。Sāślc の対応箇所には“နိဿယ”とあるように“*athayojanā*”は“*nissaya*”と同義である。
- (21) この註記の根拠は、ヒンタダのサトゥッタミッグエ・セアロー (စတုတ္ထမြန်မောရတော်) の *ဝိနာကတော်သမိုင်းသစ်* (『新三蔵史伝』) という書物である。
- (22) ボウバーヨウン寺の僧は、バーリ語による *Gūḷhatthadīpanī* と *Visuddhimaggaganṭhipadatta*、ミャンマー語による *Nett* の逐語訳を編纂した。
- (23) *Gandhavaṃsa* には、Udumbara が Makva 市で *Peṭakopadesa-tīkā* を著した、とある [GPL. pp.54,66 ; 片山 1974. pp.113,123]。その著述年は分からないが、筆者は A.D.15c 中頃から A.D.16c 中頃 (遅くとも A.D.17c) ではなかろうかと推定している (Cf. 拙稿「*Nettipakaraṇa* の註釈文献について」 pp.439)。この年代推定が正しければ、Peṭ の逐語訳よりも古い時期に Peṭ の *tīkā* が著されていたことになる。なお、Peṭ については、タトンのミンゲン・セアロー (A.D.1868-1955) が *Peṭakopadesa-aṭṭhakathā* という註釈書を著している。この比丘は *Milindapañha-aṭṭhakathā* の著者でもあるが、同書の *Nidāna-kathā* の中には、“*eteneva mahātheravarena viracitā peṭakopadesaṭṭhakathā pi sāsanassa bahū-pakārā hutvā pavattateva*” とある (Thaton Mingun Zetawun Sayadaw alias U Narada Mahāthera. *Milindapañha-aṭṭhakathā*, *Studia Philologica Buddhica Monograph Series XIII*. Trans. & Ed. Madhav M. Deshpande. Tokyo: The International Institute for Buddhist Studies of The International College for Advanced Buddhist Studies, 1999. p.2)。

ちなみに、スリランカにおいても、比較的最近において *Nett* の註釈文献が造られている。佐藤良純によれば、K.Upatissa Mahā Thera が著した *Nettiratnākāra* (A.D.20c)、Ācariya Dharmānanda Sthavīra の *Nettipradīpaya* (著述年代不詳) がある、とのことである (Cf. 佐藤良純「*Nettipakaraṇa* について」『印度學佛教學研究』12-2、1964 年)。近代のスリランカにおいても *Nett* に関心を寄せる比丘がいたことを示している。